

絶滅の田沢湖クニマス 新たに1標本 京都大で発見

クニマス サケ科に属し、世界中で田沢湖にのみ生息したとされるが実態は明らかでない。全長約30センチ。ヒメマスの近縁だが、ヒメマスにある背中上の黒い斑点

がない。かつて湖岸付近の漁師が刺し網漁を行っていた。昭和15年、田沢湖を水力発電の貯水池として利用する国策のため、玉川の強酸性水が導入されたことで絶滅した。



京都大学の舞鶴水産実験所で見つかったクニマスの標本—男鹿市の県水産振興センター

は昭和三十六(一九六〇)年十二月二十七日、あて先は「舞鶴市長浜 京都

角館南高から寄贈

田沢湖の固有種で六十年以上前に絶滅したクニマスの標本が、京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所(京都府舞鶴市)に保管されていたことが分かった。同大に九匹の標本があることは昨年末に明らかになったが、今回確認された一匹は九匹とは別ルートで京都にもたらされていた。採集にかかわった人の名前も記録されており、ゆかりの人たちは感慨を新たにしている。

標本はホルマリンを満たした瓶に入れており、体長二〇・七センチ、全体が茶色で尾びれは欠けている。裏面に「御申込みのクニマス標本を御送り致した。京都大総合博物館京都市)の中坊徹次教授(五匹)魚類学Ⅱらがことし五月に見つけ、依頼を受けた県水産振興センター(男鹿市)の杉山秀樹・内水面利用部長がエックス線検査などでクニマスと確認した。それ以前に中坊教授は博物館の標本室で、ヒメマスの標本瓶にテープで張られた古いはがきを目にして、「秋田・角館」の消印があり、日付は昭和三十六(一九六〇)年十二月二十七日、あて先は「舞鶴市長浜 京都

生保内の魚屋が採集

はがきの受取人、松原喜代松(明治四十一昭和四十二年)は、京都大農学部水産学水産生物学の初代教授。日本産の魚類を網羅した「魚類の形態と検査」の著者と、採集者の村岡熊吉は田沢湖町生保内で魚屋を営んでいた人物。熊吉の曾孫で、いまも同地で鮮魚店を営む村岡誠さん(四)は「熊吉はクニマス魚を採集し、生保内の魚屋に売っていたよ。熊吉がかかわった採集の標本は、資料室に



昭和36年の消印がある松原教授あてのはがき。昭和5年の採集と分かる

あった標本と同一か一連のものだったとみられる。武藤の二女、堀井玲子さん(七七)秋田市仁井田Ⅱは「私が角館南高に在学中、郷土資料室で標本瓶に入ったクニマスを見たことがある。父が収集したとみられる標本が見つかり、父も喜んでいたのでないか」と話す。中坊教授は「角館南高にクニマスの標本があることを知った松原教授は、標本を京都大に残しておくため、角館南高から譲ってもらったと考える」と話す。クニマスの標本は、県立博物館(秋田市金足)など秋田県内に五匹、米